茨大生×東北プロジェクト
―茨大生と共にもう一度被災地へ、そして伝える活動―

ボランティア

地域交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科　３年　田島　彩花

連携先

石塚サントラベル株式会社

顧問教員

伊藤　哲司（人文社会科学部・教授）

参加者

飯塚子都香（人文学部人文コミュニケーション学科　３年）
岩崎　　彩（人文学部人文コミュニケーション学科　３年）
高橋　佑奈（人文学部人文コミュニケーション学科　３年）
田島　彩花（人文学部人文コミュニケーション学科　３年）
大村みるほ（教育学部情報文化課程２年）
鬼澤　麻美（人文学部社会科学科２年）
河合　舞果（人文学部社会科学科２年）
佐々木侑太（人文学部社会科学科２年）
塩畑　見咲（人文学部社会科学科２年）
鈴木　真由（人文学部社会科学科２年）
石山　龍貴（人文学部社会科学科２年）
高橋絵梨子（人文学部社会科学科２年）
大川　日和（教育学部養護教諭養成課程２年）
根本　知沙（教育学部学校教員養成課程（国語）１年）
小島　彩華（教育学学校教員養成課程（国語）１年）
大井　真央（人文社会科学部現代社会学科１年）
佐藤　綺音（人文社会科学部法律経済学科１年）
中橋　彩乃（人文社会科学部法律経済学科１年）
中三川瑞樹（人文社会科学部人間文化学科１年）
西澤　秀朗（農学部食生命科学科１年）
町田　天斗（農学部食生命科学科１年）
三宅　　彩（人文社会科学部法律経済学科１年）
吉田　彩乃（人文社会科学部法律経済学科１年）

プロジェクトの概要

●背景

このプロジェクトの母体であるサークル「茨大東北ボランティア＊Fleur＊」は2012年の創立以来、活動を継続してきた。その中でも、Fleurが企画・運営するボランティアバスは、活動の中心を成していた。しかし、関心の低下やバスの料金制度改正に伴う運賃の値上がりなどが影響をし、ボランティアバスへの参加者は減少した。そのため近年では、学生企画のボランティアバスの運行を行わず、石塚サントラベル(株)様の運行しているボランティアバスに同乗する形で活動を続けてきた。この形の活動では、Fleurのメンバーは震災後の街の現状を知ることができるが、「茨大生と被災地を繋げる」というモットーを果たすことが難しいと感じていた。

実際に被災地に訪れて頂くことにより、五

感を使って自ら知ること・感じることができると考えた。

また、実際に訪れることができなくとも、手に取りやすい形で情報をまとめることで、少しでも被災地の状況を伝えることを目指した。

●目的

東日本大震災を語り継ぐこと

実際に訪れることにより、学生自身が考えること

被災地を訪れたくなるような働きかけをすること

●連携方法

本プロジェクトでは、東日本大震災直後から現在までボランティアバスを出し続ける、石塚サントラベル(株)様との連携を行っている。

具体的な連携方法としては、東北へのボランティアバスの運行、および活動に関する助言を頂いていることだ。私達の活動は、バスの運行なしでは活動を進めることはできない。学生企画のボランティアバスの運行協力のみならず、当サークルメンバーで行った岩手視察の際にもバスを運行して頂いた。その時訪れた場所については下記でふれるリーフレットにも記載されている。

●活動日程

茨大生×東北プロジェクトは、告知活動、＊Fleur＊宮城ボランティアバス2017、リーフレット作成の３つに大別される。

告知活動

2017年11月13日（月）から11月28日（火）（土日や当サークル定例日を除く）にかけて、当企画である「＊Fleur＊宮城ボラバス2017」の告知活動を行った。

チラシを作成し、昼休みに水戸キャンパス生協前にて学生向けに配布した。また、当サークル公式のTwitterでの呼びかけを行ったり、授業宣伝もさせて頂いたりした。

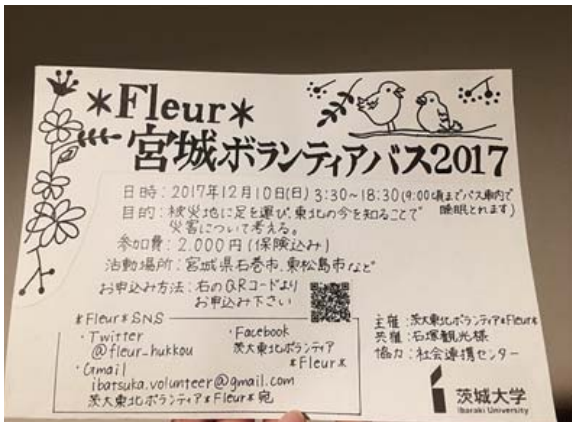

図１：実際に使用したチラシ

震災以降、東北に興味はあったものの、なかなか行けていなかった学生や学内のボランティアサークルに所属する学生など23名が集まり、当サークルメンバーを含む44名で運行することができた。

告知活動と並行して、日程や持ち物の他に訪問場所の紹介を掲載した、しおりを作成した。参加者には予め、メールにて、しおりをお送りし、被災地の状況の概要を理解して頂いた。

＊Fleur＊宮城ボランティアバス2017当日

当日は茨大前バス停に午前４時に集合し、石塚サントラベル（株）様に運行して頂くバスに乗って出発した。車内では、午前７時頃まで仮眠の時間とし、南相馬のパーキングエリアで休憩を取った後、震災で引き起こされた大津波の映像など当時の被災地の様子を鑑賞した。石塚サントラベル（株）の社長を務めておられる、綿引薫様も同乗して頂き、当時の被災地から現在に至るまでの変遷や防災の意識についてお話し頂いた。

午前９時頃、石巻にある大川小学校に到着した。そこは津波にのまれ、教員、児童の約

７割が犠牲となった場所である。慰霊碑に手を合わせた後、３時間ほど環境整備活動を行った。花壇の草刈りや花植え、また、砂利を取り除いて土を耕し新たな花壇も作った。

その後、石巻の道の駅である、上品の郷で休憩をとった。そこには、コンビニエンスストアや産直が入っており、ご当地の食べ物などは参加者の興味を惹き、お土産に購入する参加者もいた。

図２・３：大川小学校での作業の様子

午後には石巻の、南浜つなぐ館を訪れた。そこは、2015年11月に震災を伝承していく目的で建てられた施設であり、館内には震災前の街の様子を再現した復元模型などがある。そこで、当日の街の様子の説明を頂き、参加者からも質問が寄せられた。

その後、石巻周辺の街の様子をバスの中から視察した。参加者には感想を書いて頂き、水戸への帰路についた。

リーフレット『Fleur 東北紀行』の作成

今回の「＊Fleur ＊宮城ボランティアバス2017」で訪れた場所を含み、当サークルでこれまで東北地域においては、福島県、宮城県、岩手県を訪れた経験がある。そこで、当サークルで訪れた場所について、地図や紹介文、写真を添えたリーフレットにまとめる取り組みを2018年１月から２月にかけて行った。このリーフレットは茨大生に向けて、「被災地ことを知ってもらうこと」、「訪れてみたいと思ってもらうこと」を目的として作成した。リーフレットは２月中旬以降に刷りあがる予定である。

プロジェクトの成果報告

プロジェクトの成果として一番大きなものは、被災地を訪れた学生達が様々な考えを巡らせたことだ。百聞は一見にしかずと言われている通り、被災地の情報をどれだけ集めても、実際に自分でその地を訪れることにはかなわない。直接行き、見て、話を聞いて、感じたことは学生にとって大きな財産になる。ボランティアバスに参加した学生がどのようなことを感じたのか、抜粋ではあるが紹介したい。

「初めて来た方に知ってもらうこと、聞いてもらうこと、顔を出すことが、被災者の方々にとって励ましになるのではないだろうか」

「綿引社長の、どん底は我慢して待てという言葉が心に残った。心の少しを大川小において来たので、それをまた取りにいきたい。」

「波が奪った多くの命を決して無駄にしないように、今後さらなる犠牲者を出さないように今、私たちが出来る対策を考え周囲に伝えることがどれだけ重要か学べた。」

「現地に行かなければ分からない多くのことを知ることができた。」

「自分たちができることは小さなことだが、続けていくことが大事だと思った。」
「６年前の震災ではなく、今も続いている震災なのだと改めて考えることができた」
「いまの生活がいかに幸せか分かった。震災からかなり時間が経っているのにその爪痕が残っており、心が痛くなった。」

学生という、様々な物事を吸収し、考えることができる時期に、このような活動を共有できたことは、私たちFleurにとっても大きな成果であった

今後の展望

今回作成をしたリーフレット配布を計画している。茨城大学図書館や人文講義棟、理学部ラウンジにて置かせて頂くことや、兼ねてから当サークルと交流のある、「ふうあいねっと」様主催のイベントに際して、配布させて頂けるか交渉中である。

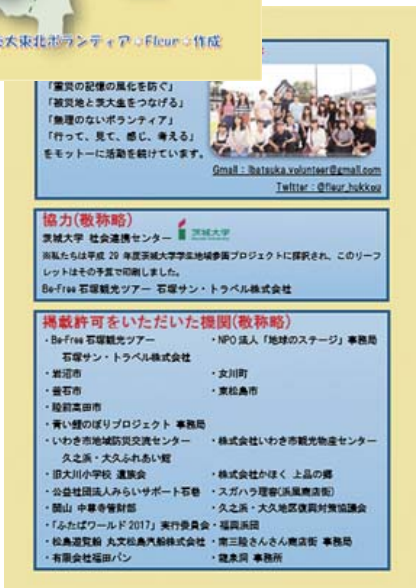

図4・5：リーフレット表紙・裏表紙